

地域医療を育てる会 情報紙 クローバー

CLOVER



発行 代表 NPO法人地域医療を育てる会
藤本晴枝
http://iryousodateru.com/
第54号 平成24年3月5日発行
東金市東金1142「東金の家」内
TEL:090-7634-7175

『コミュニティのちから』を発掘するため

地域医療を育てる会は、『コミュニティのちから』という書籍を読んで議論する読書会を、十二月まで十三回にわたって開催しています。一月二十一日(土)、第二回読書会会場の東金市ふれあいセンターには十人の参加者が集まり、地域を元気にする秘訣について活発に議論しました。

長野の健康長寿の秘訣は「保健補導員」

『コミュニティのちから』は、著者の今村晴彦さん(慶應義塾大学)らが、全国の元気な地域を取材し、そのコミュニティのエネルギーの源や機能している仕組みを解き明かしている本です。本書の前半の舞台は長野県。全国の都道府県で一人あたりの医療費が低いのに平均寿命の長い長野県は、「健康長寿」の県として知られています。その長野で健康長寿が達成された大きな理由は、地道に活動を続けてきた『保健補導員』という住民による住民のための地域組織が、上手に機能していることだと紹介されています。



私たちの地域にも、いろいろな住民組織があります。消防団をはじめとする自治組織、行政が育成に関与してきたヘルスサポーターや食生活改善推進員なども活動しています。しかし、地域のために長期にわたって頑張っている人達がいる一方、無関心な住民はこれらの活動に関わる機会がありません。多くの住民組織は、同じ人がずっと同じ役割を継続することになったり、メンバーが高齢化しても後継者がいないといった課題を抱えています。

「お互い様」の持ちまわり

長野の『保健補導員』が他の地域組織と大きく異なる点は、多くの住民が必ず一度はその役割を経験するということです。本で紹介されている須坂市や茅野市の保健補導員の場合、任期は二年で再任はほとんどなく、まさに「持ちまわり」です。

多くの人は、積極的にはないけれど、「いずれは順番がまわってくるものだから」、「おたがいさまだから」ということで順番が来たら引き受けているそうです。長野ではこれを「ほっぺたまわし」と呼ぶそうです。

各地区から選ばれた保健補導員達は、勉強の場も持ちながら、地域の様々な場で健康に関する講話や講演をしたり、啓発のための寸



読書会の様子

劇を披露したり、健康体操をリードしたりと活躍しています。

保健補導員の中心は四十代(七十代ですが、二十代や三十代の若い住民も含まれています)。

二年の任期を終えた多くが、「大変だったけれど楽しかった」「勉強になった」と感じているそうです。そして任期を終えたOB達の多くが、引き続き学んだことを生かして地域活動を継続するというのも大きな特徴だそうです。

私たちの「地域の『ちから』は？」

この日の読書会には、保健師、市議、公務員、会社員、大学教員など様々な背景を持つ有志十名が参加しました。長野と自分達の地域の住民組織と比較するとどんな違いがあるのか等、様々な意見が飛び交いました。

「長野の保健補導員がうまく廻っているのは、二年間という限定期間の『持ちまわり』と、『やってよかった』という満足感が両立しているからではないか」

「『やってよかった』と思えるのは、学習会で得た知識やノウハウを活かせる出番や、活躍できる場があるからだろう」

私たちの地域には長野のような保健補導員の組織はありませんが、既存の組織も地域住民の健康維持や生活情報の提供等の活動を広げていくにはどうしたらいいかといったことも議論されました。「東金市の場合、食生活改善推進員が保健師ともっと連携できるといいのではないか」

「消防団は、半ば強制的に役割がまわってくるが、後輩が入ってこないと卒業できないという問題点がある」

「ヘルスサポーターは、自身の健康づくりにとどまらず、地域住民の健康づくりや交流の場づくりができるといい」

さらに、私たちの地域組織の課題としては、得られたノウハウをフィードバックする仕組みが無いことや、目標設定が弱いことなどが挙げられました。

「PDCAサイクル(プラン、ドゥ、チェック、アクション)をうまく組み込めたらよい」といった意見も出されました。



ソーシャルキャピタルってなあに？

本書の著者らが日本各地の「いいコミュニティ」の事例を観察したとき、そのコミュニティには、「ソーシャル・キャピタル(地域関係資本)」が蓄積していたといえます。ソーシャル・キャピタルは、コミュニ

ニティのちからを表す指標で、3つの特徴を含んでいます。ひとつめは人のつながりによる「社会ネットワーク活動」、二つ目は住民同士の「相互信頼」、三つ目はお互い様の精神である「互酬性の規範」です。

日本国内でも地域によって、このソーシャルキャピタルに差がかなりあることが、これまでの多くの研究で知られています。では、ソーシャル・キャピタルの高いコミュニティを作るにはどうしたらよいのでしょうか？

その問いのヒントが、この本にはいっぱい詰まっているので、これから読み進めるのが楽しみです。詳しい内容はこちらからです。自発的ではない、『遠慮がちな』ソーシャルキャピタルという考え方を提示しているところが、本書の面白い点です。

参加を待ちしています

日本各地の「いいコミュニティ」の活動事例を知ること、私たちの地域にあるコミュニティ活動の存在を再認識し、それらがよりうまく機能するように働きかけていくのではないかと思います。

読書会のスケジュール

	テーマ	ページ	月日
第1章	長野県の特徴と保健補導員	12~45	2011年12月17日
	保健補導員の活動内容と感想	45~81	2012年1月21日
	保健補導員の歴史	81~106	2012年2月18日
第2章	ソーシャルキャピタルという考え方と長野のコミュニティ	108~128	2012年3月17日
	「つながっている」という感覚の大切さ	129~148	2012年4月21日
	過去のソーシャルキャピタル研究	149~162	2012年5月19日
第3章	長野県茅野市の福祉21ビーンズプラン 高齢者福祉、こどもの居場所づくり	164~182	2012年6月16日
	福岡県大牟田市の認知症ケアコミュニティ 世田谷区の商店街と健康づくり	182~201	2012年7月21日
	今までの事例に共通するもの 健診を受けるのが当たり前の村	204~224	2012年8月18日
第4章	インターネットによるコミュニティ 禁煙マラソン	224~237	2012年9月15日
	病院発のコミュニティづくり	238~266	2012年10月20日
	病院から地域への広がり	267~289	2012年11月17日
	まとめ	289~304	2012年12月15日

問い合わせ先：藤本晴枝（電話：090-7634-7175）

地域医療を育てる会の代表、藤本晴枝は、「地域活動をしているいろいろな人が、このテキストを囲んで、ほかの地域の取り組みを学んだり、自分たちの地域のことも話し合えたりしたらいいな」と語っています。それぞれが、自分の出来る事を考えて、皆でより良い地域のために力をあわせていく、そんなきっかけになることを期待しています。



(秋山美紀)

読書会は毎月一回のペースで開かれます。五月の会合には、著者の今村晴彦氏も参加して、ミニレクチャーを行うことになっています。皆様の参加をお待ちしています。